VIEW'S REPORT

2014年度、文部科学省の新事業スタート

指定校同士で情報共有し活性化を図る「スーパーグローバルハイスクール」

国を挙げてのグローバル人材育成の動きを受けて始まった「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」。これまでの事業と異なり、「幹事校」が設けられているのが特徴の1つだ。幹事校が果たす役割とは何か、SGHではどのような取り組みがされようとしているのか。幹事校である筑波大学附属高校に話を聞いた。

幹事校を設け、指定校の情報ネットワークをつくる

「スーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）」事業は、政治や経済、法律、学術などの分野で国際的に活躍するようなグローバル・リーダーの育成を目的とし、語学力と共に幅広い教養、問題解決力等の国際的素養を身に付けるための教育に取り組む高校を指定し、国が重点的に支援する。国際化を進める国内の大学を中心に、企業や国際機関等と連携した取り組みを推奨し、高校段階から「世界」を体験させ、生徒のグローバル意識を高めようとしている。

2014年度の指定校は56校。他に、「SGHアソシエイト」という枠が設けられ、54校が選定された。申請数が多かったこと、SGH事業の構想をより多くの学校に広めていくという観点での措置だ。

これまでの支援事業にはない特徴は、指定校とSGHアソシエイトの計110校が「SGHコミュニティ」というネットワークを構築する点だ。幹事校に指定された筑波大学附属高校が中心となり、各校の活動内容や課題、成果などの情報共有を図る。それぞれの取り組みがより良くなるよう、同じ目標に向かって取り組みを行う学校同士が連携し、支援し合う体制を整えようとしている。

大学との連携を密にし国際交流の事前指導を厚くする

SGHでは具体的にどんな活動を行うのか。指定校及び幹事校となった筑波大学附属高校に話を聞いた。

同校は、近隣にある附属小・中学校と共に課題解決型授業の研究を進めており、ここ数年、国際交流にも力を入れてきた。それらの取り組みの狙いはSGHの事業目的に合致しており、指定を受ければ活動を深化・発展させる好機になると捉え、申請した。構想名は「小・中・高・大が連携した課題解決によるグローバル人材の育成」で、「国際性豊かなグロー

スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業の概要

●**目的**　急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高校段階から育成する。

●**事業概要**　国際化を進める国内の大学を中心に、企業、国際機関等と連携を図り、グローバルな社会課題を発見・解決できる人材や、グローバルなビジネスで活躍できる人材の育成に取り組む高校等を「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」に指定し、質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を進める。

●**指定期間**　5年間（2014～2018年度）　●**幹事校**　筑波大学附属高校

●**指定校数**　56校（2014年度、国立4校、公立34校、私立18校）

●**SGHアソシエイト**　54校。SGH事業を踏まえたグローバル・リーダー育成に資する教育の開発・実践に取り組む高校等を「SGHアソシエイト」として位置付けた。指定校と共に「SGHコミュニティ」を形成し、情報を共有する。

バル・シチズンの育成」「世界で活躍し社会を牽引するグローバル・リーダーの育成」を目標に掲げる。課題研究の内容は、「オリンピック・パラリンピックにおける諸課題」「地球規模で考える生命・環境・災害」「グローバル化と政治・経済・外交」の3つだ。日下部公昭副校長は次のように話す。

「本校では、全教科で課題解決型の授業を取り入れ、1・2年次は一部の科目を除いて必修とし、教養教育にも力を入れています。これら既存の教育活動を生かしつつ、筑波大と連携しながらグローバルな視点や課題解決力などの育成に一層力を入れる計画です。これまで国内だけに目が向いていた生徒にもグローバル意識を持たせ、生徒全員を『グローバル・シチズン』に育て、生徒同士が切磋琢磨する中で、リーダーとなるような人材を育成したいと考えています」

本年度の取り組みは、既に行っている4つの国際交流事業で派遣する生徒延べ約40人の事前・事後指導を手厚く行うなど、グローバル・リーダーの育成を中心に考えている。例えば、「アジア太平洋青少年リーダーズサミット」や「国際学術シンポジウム」では、気候変動や自然災害などの課題の研究を進め、その成果を英語で発表し、意見交換などを行う。これまでの英語科教員や研究課題に応じた教科の教員による事前学習の指導に加え、筑波大の協力を得て指導を行うと、日下部副校長は説明する。

「大学教員の専門的な指導により、知識や思考を一層深めた生徒を派遣することで、グローバル・リーダーの育成につなげたいと考えています。更に、附属小・中学校とも連携し、高い課題解決力を持った人材の育成に取り組んでいきます」

次年度以降は、本年度の成果を基に「グローバル・シチズン」の育成を目指す事業を検討していく予定だ。

幹事校が共通課題やニーズを把握し、解決策を提案

幹事校としての役割は大きく2つある。1つめは、指定校・SGHアソシエイトの計110校が情報共有する場を提供し、「SGHコミュニティ」を構築することだ。具体的には、110校が一堂に会する「連絡協議会」を、年度始めと終わりの年2回開催する。更に、SGH専用のウェブサイトを開設。指定校・SGHアソシエイトの学校基本情報や事業内容を掲載し、各校及び関係機関が閲覧して投稿や情報交換が出来るようにする。また、各校の成果を公表し、一般からも意見を寄せられる「パブリックコメント」欄も設ける予定だ。同校を支援する筑波大学附属学校教育局の新津勝二次長は、こう話す。

「予算と時間の面から指定校が直接集まれるのは年2回が限度と考え、専用のウェブサイトを日常的な情報交換の場にしていきます。そこでは、110校の多彩な活動記録が集積され、多様な意見も集まることでしょう。更に、大学や企業、研究機関だけでなく、一般からも広く意見を寄せてもらうことによって、各校の取り組みが活性化すると期待しています」

2つめは、連絡協議会やウェブサイトで情報共有を図る中で、指定校に共通する課題やニーズを把握し、解決法を提案することだ。教育研究面と管理運営面の課題があると考えられるが、前者は附属高校が、後者は附属学校教育局が主体となり対応していく。場合によっては、指定校の課題をまとめて文部科学省に相談し、その結果を「SGHコミュニティ」で共有することもある。

「筑波大は国際化に重点を置いて教育活動を進めており、SGHも全学体制で支援していきます。今後は、指定校の生徒同士の交流、筑波大の留学生を交えた交流など、多様な人との交流を促し、豊かな人間性を備えたグローバル人材の育成に貢献したいと考えています」（新津次長）

筑波大学附属高校副校長
日下部公昭
くさかべ・こうしょう
教職歴37年。同校に赴任して23年目。担当教科は世界史。

筑波大学附属高校
◎「自主・自律・自由」を教育モットーに、全人的人間の育成を図る。筑波大、附属小・中学校と連携しながら教育研究・開発に取り組む。
◎全日制／普通科／共学　◎1学年約240人
◎2014年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、筑波大、東京大、東京工業大、一橋大などに73人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ342人が合格。

筑波大学附属学校教育局次長
新津勝二
にいつ・かつじ
文部科学省初等中等教育局教育課程課課長補佐等を経て、2012年から現職。

筑波大学附属学校教育局
◎11校の附属学校の管理機関として、大学も含め、附属学校との共同研究、校務の統括・調整等を行う。